

# 初期の小崎弘道日記(3)

土肥昭夫

『小崎弘道自筆集』(12)〔続き〕

日記 第四〔続き〕

明治廿年一月

同一日 土 晴

午前在宅説教ノ支度ヲ為ス早朝ヨリ祝賀ノ客陸續尋子来ル

午後岡田兄ト共ニ長岡岡部神田其二三ノ人ヲ訪フテ祝賀ノ礼ヲ述フ

夜来客アリテ十一時過キ迄種々ノ遊ヲ為ス

同二日 日 晴

午前九時ヨリ番町ニテ説教ス又十時半ヨリ靈南坂会堂ニテ説

教ス両所共聴衆例ノ如シ又説教後三人ノ受洗者アリ共ニ聖晩

餐ノ礼ヲ守ル

十二時過キ三好退藏氏来訪ス

二時ヨリ仲町会堂ニテ説教ス

夜番町ニテ説教シタルモ精神乏シクシテ十分ノ説教ヲ為ス能

ハサリシ

同三日 月 晴

午前在宅来客多シ同十一時ヨリ三好氏并ニ海老名木村田口ノ

三氏ヲ訪フ夜番町ノ祈禱会ニ臨ミ夫ヨリ三好宅ノスピントル

氏講義ニ会ス此日宅ニ多クノ人ヲ招キテ遊ヲ為ス

同四日 火 晴

午前来客ノミ多クシテ何ヲモ為スヲ得ズ

午後又来客多カリシ

夜靈南坂会堂ノ祈禱会ニ臨ム来会者凡ソ四五十名頗ル有益ナ

ル会ナリシ

同五日 水 晴

午前基督教新聞ノ原稿ヲ認ム

午後番町和田垣氏宅ニテ番町教会ノ親睦会アリ集ルモノ凡ソ

六十名頗ル盛会ナリシ

夜番町ノ祈禱会ニ会ス集ルモノ凡ソ三四十名

同六日 木 雪

朝ヨリ雪アリ午前在宅

午後尅時ヨリ宅ニテ聖書ノ講義ヲ為ス

夫ヨリ警醒社及松山氏宅ニ至ル

夜靈南坂会堂ニテ祈禱会アリ降雪ナリシ故集ルモノ平常ヨリ

少シ夫ヨリ服部氏宅ニテ種々ノ遊ヲ為ス

同七日 金 晴

雪ハ晴レタレトモ雪トケニテ寒氣甚シ又道路甚タ悪シ

午前在宅演説ノ支度ヲ為ス

午後一時厚生館ニ行キ青年同盟会ノ招キニ応シ演説ヲ為ス演

題ハ基督論ナリシ聴衆凡ソ四五百名靜ニ謹聴セリ

夜番町ノ祈禱会ニ赴ク

同八日 土 晴

午前在宅説教ノ支度ヲ為ス本日岩村之母君横浜ノ二百一十二

番女学校へ入学ス森本杉山ノ両氏之ヲ送りテ横浜ニ行ク

午後二時半ヨリ隣家湯浅氏宅ニテ伝道委員ノ集会ヲ為ス

京橋近傍ニ講義所ヲ設ル事外二三件ヲ議決ス

夜靈南坂会堂ニ於テ四教会ノ祈禱会アリ集ルモノ七八十名

同九日 日 晴

午前九時番町会堂ニテ説教集ルモノ七八十名十時半ヨリ靈南

坂会堂ニテ説教集ルモノ凡ソ百名内外

午後二時ヨリ仲之町会堂ニテ宗教改革史ノ講義ヲ始ム集ルモ

ノ凡三十名

夜靈南坂会堂ニテ杉山兄氏説教余後ニ勸メヲ為ス

同十日 月 晴

午前在宅読書ス午後〔眼〕鏡屋ニ行キ夫ヨリ三好氏ヲ訪ヒ小

池氏ニ至リ講義ヲ為シ夫ヨリ徳富氏ト共ニ矢野氏ヲ訪フタレ

トモ留守ニテ面会ヲ得サリシ夫ヨリ中島信行氏ヲ訪テ九時過

キ帰宅ス

同十一日 火 雨

午前在宅新聞原稿ヲ認ム〔以下四行抹消〕

夜番町丹羽氏ニテ行テ講義ヲ為ス

同十二日 水 晴

午前在宅伝道会社報告ヲ作り之ヲ神戸ニ郵送ス

午後五時ヨリミスプリンス女ヲ訪フ夫ヨリ岡田氏ト共川村氏

ヲ訪ヒ種々教ノ談ヲ為シ十時比帰宅ス

同十三日 木 晴

午前在宅

午後聖書ノ会ヲ為シテ夫ヨリ高橋新吉氏ヲ訪ヒ妻君ニ面会シ

暫時教ノ話ヲ為シテ帰宅ス

夜祈禱会アリ集ルモノ平常ナリシモ熱心ナル勸メアリ頗ル有

益ナル会ナリシ

同十四日 金 曜日 雨

午前在宅

午後モ大雨ニ付他出セズ

夜番町会堂ニ出ツヘリング氏ノ講義アリ但シ文明ト基督教ノ

關係ナリ

同十五日 土 雨

午前説教ノ支度ヲ為ス

(以下一一行抹消)

午後朽木氏ヨリ案内ヲ受ケシモ用事アリテ行ク能ハサリシ

今夜頗大ナル地震アリ

同十六日 日 晴

番町靈南坂両所ニテ同シ説教ヲ為ス番町ニテハ近来集ルモノ

大ニ増加セリ

午後仲之町ニテ改革史第二回ノ演説ヲ為ス

夜番町ニテ説教ス頗ル感スルモノアリタルカ如シ

同十七日 月 晴

午前在宅午後三時ヨリ小池氏宅ニテ講義ヲ為ス

夜九時過帰宅ス

同十八日 火 大雪

本日午前ヨリ大雪ニテ終日外出スルヲ得サリシ

同十九日 水 曇

本日モ終日在宅ナリシ

同廿日 木 晴

午前在宅

夜祈禱会アリ集ルモノ常ヨリ少シ

同廿一日 金 雨

午前在宅

夜番町ニテ祈禱会アリ頗ル盛会ナリシ

同廿二日 土 曇

午前在宅

午後二時ヨリ番町ニテ安息日学校ノ相談アリ森本君校長ノ辭

職ヲ聞キ届ケ教師ノ受持ヲ定メ又會堂所屬ノ一室ヲ建ルコト

ヲ議決ス

夫ヨリ野村氏ヲ訪ヒ種々教ノ話ヲ為シ夕飯ノ饗ニ与レリ

夜番町ニテ受洗者ノ試験ヲ為ス其數凡ソ二十五六名斯ク案外

ニ多ノ受洗者ヲ生シタルハ偏ニ神ニ感謝セサル可ラズ

同廿三日 日 曇 雨

番町靈南坂共ニ同シ説教ヲ為ス番町ノ方集ル人頗ル多クナレ

リ

午後二時仲之町ニテ改革史第三回ノ講義ヲ為ス雨天ニモ閑ハ

ラス聴講者頗ル多シ

夜靈南坂ニテハ杉山并森本ノ二兄ノ説教アリ

同廿四日 月 雨

午前在宅原稿ヲ認ム

午後四時ヨリ小池氏宅ニ行キ講義ヲ為ス

帰途三好氏ヲ訪テ帰ル

同廿五日 火 雨

午前在宅

夜丹羽氏宅ノ集リニ行キシニ頗ル有益ナリシカ如シ

此日午後二時會談済ミタル後江口氏ヲ訪ヒ種々教ノ話ヲ為セ

リ

又今朝主上京都へ向テ出発セラレタリ

同廿六日 水 雨

午前在宅

午後川上氏ヲ訪ヒ種々教ノ話ヲ為ス

夜隣家湯淺氏宅ニテ雜誌相談ノ為メ集リシモ植村氏来ラサリ

シヲ以テ何ノ相談ヲモ為スヲ得サリシ

同廿七日 木 晴

午前在宅

午後二時ヨリ聖書ノ会読ヲ為シ夫ヨリ富田氏ヲ訪ヒタルモ病

氣ニテ面会スルヲ得サリシ夫ヨリ高崎氏ヲ訪ヒ夕飯ノ饗ニ与

リテ帰ル

夜祈禱会アリ集ルモノ平常ニ異ナラサレトモ熱心ナル祈禱及

ヒ勸メアリテ甚タ有益ナル会ナリシ願クハ神ヨ尚ホ此僕ヲ憐

同二十八日 金 曇

午前在宅

午後四時ヨリ野村氏ヲ訪フタルモ留守ニテ面会スルヲ得サリ

シ夫ヨリ谷田氏ヲ訪ヒ夕飯ノ饗ニ与レリ

夜番町ニテヘリンク氏ノ講義アリ集ルモノ凡ソ平常通り

同二十九日 土

午前在宅

午後 (以下記述なし)

同三十日 日 雨

午前靈南坂会堂ニテ説教ス大風雨ニテ集ルモノ平ヨリ少シ

大山夫人来レリ

午後二時仲之町会堂ニテ講義ス聴講者凡ソ二十五六名  
夜番町ニテ説教聴衆凡ソ七十名謹テ聴聞ス

同三十一日 月 曇

午前在宅

午後四時ヨリ小池氏宅ニ行キ講義ス

二月

二月一日 火 曇

昨日ヨリ少々ノ風邪ノ気味アリテ何事モ十分為スヲ得ズ

五時比富田氏ヲ尋子タルニ会市原氏ノ仙台ヨリ出京スルニ逢

フ  
夜丹羽氏ニ行クラ止メ止リテ市原氏ト共ニ談ス

同二日 水 晴

本日風邪ニテ朝ヨリ打チ臥シタリ

同三日 木 曇

風邪少シ宜シ 夜祈禱会ニ出席ス

同四日 金 曇

午前在宅 午後三時過キヨリ隣家湯淺氏方ニテ伝道委員ノ集

ヲ為シ種々伝道上ノ相談ヲ為セリ

後天色々説教ノ僻ニ付互ニ批評スル所アリシガ余ガ説教ヲ以

テ常ニ人ヲ責ムルニ傾ケリトノ説アリシガ実ニ至当ノ評ト云

フベシ宜シク之ヲ深く心ニ銘シ後來ヲ誠ムベシ

又常ニ信徒ノ有様ニ応シ説教スベシ又成ルベク例論ヲ多く用

ユベシト忠告アリシガ至当ノ忠告ト云フベシ

同五日 土 晴

本日風邪大ニ快シ

同六日 日 晴

午前番町ニテ説教二十三名ニバプテスマヲ施シ後晚餐ノ礼ヲ

守ル此日集ルモノ凡ソ七八十名ナリシ後チ和田垣氏ニ集リ安

息日学校ノ相談ヲ為ス

午後二時過キヨリ麻布仲之町会堂ニテ講義ス

会堂靈南坂会堂ニテ説教ス但シ午前ハ森本氏説教セラレタリ

同七日 月 晴

昨夜ヨリ又風邪ヲ引反セシ気味アリテ終日気分宜シカラズ午

後原稿ヲ認ム

同八日 火 晴

本日ヨリ風邪ニテ打臥ス

同九日 水 晴

病床ニアリ

同十日 木 晴

病床ニアリ

同十一日 金 晴

本日同教会ノ信徒池上ノ本門寺迄出遊ス余尚ホ病床ヲ出ルヲ

得サリシ

同十二日 土 晴

本日尚ホ頭痛止マズ外出セズ

同十三日 日 晴

番町ニテ説教ス三好氏昨夜熱海ヨリ帰り出席ス

夫ヨリ靈南坂ニテ説教ス昼ノ講義ハ休ミタリ番町ノ夜ノ講義  
ハ海老名兄ニ依頼ス

同十四日 月 晴

本日用心致シ外出ヲ止メタリ

同十五日 火 風多シ

本日ヨリ大概全快セルカ如シ夕刻ヨリ共存同衆ノ会ニ出ツ

同十六日 水 晴

午前宅ニアリテ学校設立ノ相談ヲ為セリ午後三時過キヨリ海

老名兄ト共小石川杉氏ヲ訪フ帰路三好氏ニ立チ寄り

同十七日 木 晴

午前在宅午後七時靈南坂会堂ニテ祈禱会アリ集ルモノ平常ヨ

リ多シ

同十八日 金 晴

午前在宅午後四時ヨリ野村氏宅ニ行種々教ノ話ヲ為ス夜番町

ニテヘリング氏ノ講義アリ

同十九日 土 晴

午前在宅

同廿日 日 晴

午前番町ニテ説教夫ヨリ靈南坂ニテ説教番町ノ方集ル人甚々

多シ

午後二時ヨリ仲之町ニテ講義ス集ルモノ堂ニ滿ツ

夜靈南坂ニテ説教ス集ルモノ平常ヨリ多シ

神ハ吾人ヲ恵ミ給フナレトモ吾人常ニ睡テ其召ニ応スル能ハ  
サルハ甚々遺憾トスル所ナリ

同廿一日 月 晴

午前在宅午後基督教新聞原稿ヲ認ム

夜三好氏之集ニ会ススピン子ル氏モレピヤントメソダスト両  
教会ノ起原歴史ヲ述ブ此日市原氏京都ヨリ来ル

同廿二日 火 晴

午前在宅午後聖書ノ会読ヲ為ス夫ヨリ来会アリ四時比ヨリ湯  
浅氏宅ニテ森本海老名松山市原ノ諸氏ト会シ種々教会前途ノ  
相談ヲ為ス

同廿三日 水 晴

午前六合ノ原稿ヲ認ム

夜牛込小池氏宅ニ赴キ種々教ノ談ヲ為ス

同廿四日 木 晴

午前在宅午後聖書ノ会読ヲ為シ夫ヨリ江口氏ヲ訪フ夜祈禱会  
ヲ催フス集ルモノ凡ソ三十余名後洗礼志願者三名ノ試験ヲ為  
ス

同廿五日 金 晴

午前在宅説教講義ノ支度ヲ為ス午後四時ヨリ野村氏宅ニ行キ  
聖書ヲ教ユ

同廿六日 土 晴

午前新聞原稿ヲ認ム夜説教ノ支度ヲ為ス

同廿七日 日 曇

午前番町ニテ説教夫ヨリ靈南坂ニテ説教両所共聴衆頗ル多シ  
唯説教ニ精神乏キヲ覺ユ

午後二時宗教改革史ノ講義モ聴衆頗ル多シ

夜番町説教ハ稍精神アリシ様ニ覺ユ感謝スヘキナリ聴衆モ亦  
通例ヨリ多カリシ

同廿八日 月 曇

午前来客ノ為メニ消費ス午後小池氏ノ講義夫ヨリ番町三好氏  
宅ノ集ニ会ス

三月

三月一日 火 晴

午前又来客ノ為メニ消費ス

夜丹羽氏ヲ訪ヒ講義ヲ為ス

此日午後一時ヨリ聖書ノ講義ヲ為シ二時ヨリ教会委員及ヒ安  
息日学校教師ノ集ヲ為ス

同二日 水 晴

午前在宅馬可伝註解ノ起草ヲ為ス夜三好氏宅ニ行キ聖書ノ会  
読ヲ為ス

同三日 木 晴

午前在宅書状三四通ヲ認ム正午麻布阿部邸ニ□□□午後二時  
ヨリ会読ヲ為ス

三時ヨリ井深氏宅ニ行テ同兄妹君ノ信仰ヲ問フ

夜祈禱会アリ頗ル有益ナル会ナリシ

迂生ヤ怠惰甚シ妄リニ聖職ヲ汚シ牧師ノ務ヲ為スト雖モ一事  
功ヲ奏スル能ハズ唯聖意ヲ穢スコトアルノミ願クハ此僕ヲ憐  
ミ其心ニアル將ニ消ヘントスル火ヲ聖靈ノ風ヲ以テ熾ナラシ  
メ給ハンコトヲアーメン

厚生館ナル学校ヲ創設セン為メ靈南坂町十四番地ノ一家ヲ月  
七円ニテ借り受ケ

同四日 金 晴

午前在宅午後四時ヨリ野村氏宅ニ行テ聖書ノ会読ヲ為ス  
夜番町ニテ祈禱会アリ熱心祈禱スヘキコトヲ勸メシニ折ルモ  
ノ続々起リテ絶ヘサリシハ実ニ感謝スル所ナリ

同五日 土 晴

午前在宅新島氏上京ス午後会堂ニテ青年ノ為メ演説ス後ニス  
ピン子ル氏ノ演説アリ集ルモノ多カラサリシ

同六日 日 晴

午前番町ニテ説教ス集ルモノ常ノ如シ  
夫ヨリ靈南坂ニテハ新島氏説教ス聴衆満堂立錫ノ地ナカリシ  
男女小児共十一人ノ受洗者アリタリ  
後晩餐ヲ守ル

午後仲之町ニテ講義ス

夜靈南坂ニテ説ス

同七日 月 晴

午前新島氏ト共ニ談ス

午後三時ヨリ湯浅兄ニテ相談会ヲ開ク

夜三好氏ニテスピ子ル氏ノ講義アリ

同八日 火 晴

午前在宅

午後青木氏并大山氏ヲ訪フ留守差支ニテ面会スルヲ得サリシ  
夫ヨリ内藤氏ヲ訪ヒ暫時談ヲ為シテ帰ル

夜丹羽氏宅ニ至リ聖書ノ会読ヲ為ス

同九日 水 暴風雨

午前在宅仙台行ノ支度ヲ為ス

午後四時比ヨリ新島先生ト共ニ三好氏ニ到リ篠崎氏ト共種々  
新瀧男女学校設立ノ相談ヲ為ス

夜晩餐ノ饗ニ与ル夫ヨリ通例ノ聖書会読ヲ為ス跡ニ新島氏  
感ヲ述ブ

同十日 木 曇

午前五時前宅ヲ発シ六時発ノ汽車ニテ奥州ニ向テ出發ス  
十二時半比黒磯ニ着ス

夫ヨリ馬車ニテ行ク管ナリシニ豈ニ凶ランヤ昨日ノ大雪ニテ  
路悪シクシテ車通スル能ハズ止ムヲ得ズ人夫ヲ雇ヒ荷物ヲ負  
ハシメテ自ラ歩行ス白川ニ至ル二三里ノ処ヨリ雪深クシテ甚  
タ歩行ニ困ム白川ニ着セシハ凡ソ八時比ナリシ宿ノ主人ニ聞  
クニ昨日ノ雪ハ四十年以来ノ大雪ナリト白川近傍ニテハ深サ  
凡ソ二三尺所ニヨリ四五尺アルモノアリ此迄数々旅行セシモ  
今日ノ如ク困難ヲ窮メシハ甚タ稀レナリ

同十一日 金 曇

午前六時半白川榭屋ヲ発ス同行四人アリ昨日ノ如ク人夫ヲ雇  
ヒ荷物ヲ負ハシメ歩行ス此三人ハ昨日途中路連レトナリシモ  
ノナリ須賀川マデ至リ二人引ノ車ニ乗リ郡山ニ至リ他ノ三人  
二分レ独リ二人引ノ車ニテ二本松ニ着ス時七時過キナリ

同十二日 土 曇

午前七時前二人引ノ腕車ニテ二本松ヲ発シ十時比福島ニ着ス

夫ヨリ道善クナリシヲ一人引ニテ藤田ニテ午飯ヲ喫シ岩沼ヨリ日暮レ仙台ニ着セシ夜八時過キナリシ

旅店ハ針生久助ナリシガ図ラズモ綱島新原山岡ノ諸君余ニ先テ之ニ泊セシヲ見ル直ニ行テ其室ヲ訪ヒ共ニ歎ラ尽セリ

同十三日 日 雪

午前九時ヨリ東ニ番町ノ講義所(本願寺別院)ニ集リ會議ヲ開キ教会設立ノ事ヲ議ス

午後七時ヨリ設立ノ式ヲ行フ余始メニ説教ヲ為シ新原兄設立ノ祈ヲ為シ次ニデフオレスト氏六人ニバプテスマヲ施シ次ニ綱島氏教会ヘノ勸メヲ為シ終リテ本多山岡両氏晚餐ヲ司リコルチス氏ノ祝禱ニテ会ヲ閉ツ集ルモノ凡ソ二百五十人

夜七時ヨリ説教会アリ山岡綱島ノ両氏説教ス集ルモノ凡ソ百余人

市原氏病ニ因テ臥ス久野氏亦疾病ナリ独リ和田兄健然ニシテ事ヲ掌中ス為メニ不整頓ナル所モアリシカ如シ

夕飯ハコルチス氏ノ饗スルトナル

同十四日 月 曇

午前八時半英学校ニ行キ生徒ニ勸メヲ為ス生徒凡ソ百五十余名アリ帰路本多氏ニ立寄り種々談ヲ為シ居タリシニ押川氏偶來訪ス様々教会一致ノコトナトヲ談シ十二時比ニ至ル

昼デフオレスト氏ノ饗ニ与ル夫ヨリ再ヒ市原氏宅ニ会スル積リナリシモ同氏病快カラザルヲ以テデフオレスト氏宅ニ会シテ相談ヲ為ス

向後奥羽ノ伝道ヲ盛ニスルノ計画アルモ人少ク財亦乏キヲ以

テ容易ニ之ヲ拡張スルヲ得ズ先ツ五月ノ會議ヲ得テ差当リ綱島兄ヲ仙台ニ招キ福島ニ松尾氏ヲ召ビ他ニ一人ノ伝道士ヲ招キ盛岡ニ着セシムルコトニ決ス

夫ヨリホワイト氏ノ招キニ依リ晚餐ノ饗ニ与ル

夜又講義所ニ於テ説教会片桐新島ノ二兄ト共ニ説教ス聴衆凡ソ百四五十名アリタリ

同十五日 火 曇

午前在館來客ノ応接ニ費ヤス

午後二時半ヨリ講義所ニテ親睦会アリ又夕刻ヨリ押川本多両氏ノ招ニテ洋食ノ饗ヲ受ケ九時過キ帰館ス

同十六日 水 雪 曇

午前七時前馬車ニテ仙台ヲ発ス雪アリテ寒氣甚シ白石ニテ午飯ヲ喫シ四時前ニ福島ニ着藤屋ニ泊ス途中寒風面ヲ吹膚ヲ指スカ如クナリシ

同十七日 木 曇

午前綱島氏ヲ訪ヒ夫ヨリ共信夫公園地ニ行イテ暫ク休息ス共ニ牛店ニ至リ牛肉ヲ食セシニ肉堅ク且粗ニ食フ可ラズ

夜綱島氏ト共ニ同処ノ官吏ナル多田氏ヲ訪ヒ種々勸メヲナセシニ終ニ本夜ヨリ神ニ従フノ決心ヲナセル旨ヲ告ケシヲ以テ甚タ喜ビ共ニ神ニ感謝セリ但シ同氏ハ曾テ天主教ニテ洗礼ヲ受ケシ人ニテ此迄道ヲ求メ居タルモノナリ

夫ヨリ渡辺氏ヲ訪ヒ又勸メヲ為ス同氏ハ農商課長ニテ稍道ヲ求メ居ル人ナルガ残念ナカラ未タ断然之ニ従フニ至ラズ

此夜宿ニ來訪スルモノモアリ入寢セシハ十二時過キナリシ



同十八日 金 大雨

午前六時大雨ヲ冒カシテ福島ヲ出ツ松川ヨリ二本松ニ至ル比  
雨最モ甚シ十二時比ニ至リテ雨稍ク暗ル然シ雨ニ替ヘテ暴風  
起ル本宮ニテ午飯ヲ喫シ夫ヨリ折レテ若松道ニ入ル路悪シク  
風烈シクシテ車進マズ三時過キ熱海ニ着ス之ヨリ車通セサル  
ヲ以テ人ヲ雇ヒ三人ノ荷ヲ負ハシメ風ニ向テ山県ニ至ル同処  
ニ着セシハ凡ソ七時前ナリシ本日ハ終日風雨ニ悩マサレ途中  
困難ヲ極メシコト一方ナラズ

同十九日 土 雪、風

早朝船ニテ稻早代ノ湖ヲ渡ル管ナリシガ風強クシテ船出ツル  
能ハズ陸行セントスルモ雪アリ且ツ暴風ニ向フヲ以テ行クラ  
得ズ止ムヲ得ズ又一日爰ニ止マルニ決ス嗚呼今回ノ行ヤ出ツ  
ルニ雪ノ難ニ逢ヒ今又此風雪ノ難ニ罹リ何ゾ夫レ斯ノ如ク不  
幸ナル焉ソ知ラン天吾人ヲ玉ニスルニ此難ヲ以テセル

同二十日 日 晴

今朝久シブリニ天氣晴ル

此日ハ安息日ナルモ止ムヲ得ズ山県八時出帆ノ汽船ニテ出発  
シテ湖水ヲ渡シ旭日山ニ映シテ白雪皚々海上波静カニシテ水  
蒼々四十五六分立テ戸ノ口ニ着ス夫ヨリ上陸シタルニ道悪キ  
ヲ以テ歩行セサルヲ得ズ歩シテ二里許リ行キ車ニ乘リ十一時  
比ニ若松ニ着シ柴町一丁目清水屋ニ泊ス

暫ラクシテ信徒数名ヒ来ル聞ク所ニヨレバ信徒二名ハ吾人  
ノ着ノ遅キヲ氣遣ヒ態々山県マデ迎ニ行キタリト吾人ハ行キ  
違フテ此等ノ人ニ逢ハサリキ

午後二時ヨリ馬場町ノ新講義所ニ於テ説教会ヲ開ク山岡兄来  
リテ見ヨ新原兄基督教ヲ信スルノ理由余ハ天国ハ近シトノ題  
ニテ説教ス集ルモノ信徒未信徒ヲ合セテ凡ソ七拾名アリ  
夜一新亭ト称スル貧席ニテ説教会ヲ開ク山岡兄人ノ運命新原  
兄幸福ノ道余ハ宗教ノ必要ヲ題トシテ説教集ルモノ凡ソ三百  
名聴衆中二三ノ妨害者アリ喧シク叫テ説教ノ妨ヲ為ス巡查ヲ  
呼ヒ来リテ稍クニシテ之ヲ鎮定スルヲ得タリ蓋シ其妨害者ハ  
駭邪演説ノ為メトテ他方ヨリ入り来ルモノト僧侶ノ子弟ナリ  
ト云フ

同二十一日 月 晴

午前山岡兄ト共ニ栗屋照井秋山安瀨ノ四氏ヲ訪フ  
午後信徒諸氏ト共ニ東山ニ遊テ入湯ス信徒等ニ種々教会設立  
ノコトニ付勸メヲ為ス  
夕飯ハ中村氏ノ饗スル所トナル  
夜又一新亭ニ於テ演説会アリ山岡氏ヲ讀テ感アリ新原兄疑  
ノ必要余ハ日本青年ノ責任ヲ題トシテ演説ス必ス聴衆中妨害  
者ノ起ランコトヲ預メ凶リ種々之ヲ防禦スルノ計ヲ尽クセシ  
故案外ニ静カナリシハ偏ニ神ニ感謝スル所ナリ願クハ神ヨ此  
地ヲ祝シ給テ速ニ盛ナル教会ヲ起シ給ハントヲ  
此夜十二時過キ入寝ス

同二十二日 火 曇

午前六時前若松ヲ発ス信徒八九名余等二人ヲ送ラン為メ五時  
比ヨリ来訪ス右信者ト共ニ瀧沢ニ至リテ分ル 八時比戸ノ口  
ニ着ス已ニ船ノ出帆セシ跡ナレバ止ムヲ得ズ十時マデ待タザ

ルヲ得ズ十一時半比山県ニ着シ夫ヨリ腕車ニ乗リテ熱海郡山ヲ經六時比須賀川ニ至リ山城屋ニテ泊ス

同二十三日 水 曇

午前六時須賀川ヲ発シ高久ニテ昼飯ヲ喫シ午後比黒磯ノステーションニ着ス同処二時五十分発ノ汽車ニテ八時半上野ニ着シ夫ヨリ腕車ニ乗り九時半過キ帰宅ス家内皆々無事千代ト共ニ神ノ恩寵ヲ感謝ス但シ新原氏トハ大宮ニテ分レ同氏ハ同夜同処ニ一泊シ明朝上野ヘ向ケ出發セララル、管ナリ

同二十四日 木 晴

午前在宅書状ヲ認ム午後四時ヨリ湯浅兄宅ニテ松山森本ノ二兄ト共ニ集種々年会ニ関スル事件ヲ議定ス

夜折禱會アリ杉山兄司會シ余カ話ト二三ノ折禱アリテ頗ル有益ナル会ナリシ

同廿五日 金 晴

午前在宅講義ノ支度ヲ為ス午後書状ヲ認ム夜番町ノ講義アリ

同廿六日 土

同二十七日 日

午前靈南坂番町両所ノ説教ヲ勤ム午後二時仲之町ニテ講義ヲ為シ夜番町ニテ説教ス

同廿八日 月

午前在宅午後四時ヨリ牛込小池氏ニ行キテ講義ス夜三好氏宅ノ講義アリ

同二十九日 火 曇

午前十一時比ヨリ杉山氏ト共ニ布田ニ向テ出發ス二時比同所

ニ着三時過キヨリ演說會ヲ始ム下曾根杉山余ノ三人演說ス聴衆多カラサレトモ皆謹聴ス夜又八時過キヨリ開會演說聴衆晝間ト同シ但シ聴衆ハ尚ホ感スル所アリタルガ如シ

同三十日 水 晴

午前七時前ヨリ布田ヲ發シ十一時比帰宅ス

夜三好氏宅ニテ聖書ノ會読ヲ為ス

同三十一日 木

午前在宅 夜會堂ニテ折禱會アリタリ

四月

四月一日 金 晴

午前在宅午後番町野村氏宅ニ行キ聖書ヲ講ス

夜徳富湯浅ノ二氏ト共ニ矢野文雄氏ニ招カレ晚餐ノ饗ニ与ル種々政治上ノ話ヲ為シテ帰ル

四月二日 土 雨

午前在宅午後クリーン氏京都ヨリ来ル同日青年會ノ演說アリタルモ之ニ會セサリシ又野村氏ノ招キニ与ルモクリーン氏来ル居ルヲ以テ之ニ応スル能ハズ千代繼憲ノミ其饗ニ与リタリ

同三日 日 雨

午前番町靈南坂両所ノ説教ヲ勤ム午後仲之町ノ講義ヲ為ス夜頗ル疲勞セシヲ以テ説教ヲ杉山氏ニ依頼シ余ハ唯少シノ勸メヲ為シタリ

同四日 月 晴

午前在宅午後築地ニ至リ夫ヨリ三好氏ニ行キタリ

同五日 火 晴

午前在宅クリン氏十二(時)前ニ上京ス三時比ヨリ森本海老名湯浅松山井ニ杉山ノ五氏来リ共ニ伝道上ノ相談ヲ為ス

夜横浜ニ行キメソデスト会堂ニテ説教ス聴衆堂ニ満チ居タルモ精神乏シクシテ十分ノ演説ヲ為ス能ハサリシ

同六日 水 晴

午前在宅午後高崎杉山小野ノ諸氏ヲ問フ

夜三好氏ニテ聖書ヲ講ス

同七日 木 晴

午前グリーン氏ト共ニ番町三好氏ヲ訪ヒ又同氏ノ邸宅ヲ捜シ夫ヨリ上野ニ行キ共進会ヲ見ル

午後在宅夜会堂ニテ折禱会アリ

同八日 金 雨

午前在宅夜隣家氏方ニテ饗ヲ受ケ夫ヨリグリナン氏ト共ニ番町ニ行キグリーン氏ノ説教アリ

同九日 土 晴

午前在宅午後壹時半比ヨリ愛隣会ニ臨ミ少々教ノ話ヲ為ス夫ヨリ粟津氏宅ニテ催フセル親睦会ニ赴キ六時過キ帰宅ス

夜吉原ノ夜桜ヲ観ントテ十一人ノ同行ト共ニ浅草ヲ経吉原ニ至ル同処ノ桜ハ未タ開カズ偶二三ノ開綻セルモノアルヲ見ル余初メテ遊女ノ店ヲ張ルヲ見ル感慨少カラズ夫ヨリ上野ヘ回

リ同処ノ桜ヲ観ル上野ハ目下満開ノ候ナリ夜十二時比帰宅ス

同十日 日 晴

午前番町ニテ基督ノ復活ヲ題トシテ説教ス

靈南坂ニテハグリーン氏ノ説教アリ

午後仲之町ニテ例ノ講義ス

午後五時ヨリ三好氏宅ニテクリン氏ト共ニ晚餐ノ饗ヲ受ケ夫ヨリ会堂ニテグリーン氏ノ説教アリ聴衆頗ル多シ

同十一日 月 晴

午前在宅新聞原稿ヲ認ム 午後グリーン氏ト共ニ湯浅氏宅ニテ種々ノ相談ヲ為ス夫ヨリ宅ニテ両隣家夫婦クリン其他三

四ノ友人ヲ招テ饗応ス夜小池氏宅ノ集ヲ為ス

同十二日 火 雨

午前在宅

午後四時ヨリ野村宅ニ講義ヲ為シ夜朽木氏方ニテ説教ス

同十三日 水 晴

午前在宅

午後銀座邊ヲ遊歩ス

夜三好氏宅ニテスピ子ルノ講義アリ其聖書ノ会説ヲ為ス

同十四日 木 晴

午前九時ヨリ家内四人丸木ニテ写真ヲ取ル夫ヨリ千代ト共ニ谷中ノ墓ニ参リ上野ノ共進会ヲ見三時比帰宅ス

夜折禱会アリ集ルモノ平常ヨリ少シ

同十五日 金 晴

午前在宅

午後日吉町共存同衆館ニ至リ夫ヨリ番町会堂ニテ受洗者ノ試験ヲ為シ後折禱会ヲ開ク受洗者男女凡テ九名ナリ

同十六日 土 晴

近日俄ニ暖氣ヲ催フセリ千代少シク不塩梅ナリシガ余モ亦少々頭痛ヲ感ス終日在宅

同十七日 日 晴

午前九時番町ニテ説教後男女小児十五名ニ洗礼ヲ施ス後聖晩餐ヲ守ル

午後仲之町ニテ講義ス

夜会堂ニテ説教ス集ルモノ平常ヨリ少シ

同十八日 月 晴

午前在宅 午後午込小池氏ニテ講義ヲ為シ夜三好氏宅ニテ講義ヲ聴ク

同十九日 火 晴

午前在宅

午後四時ヨリ野村氏ニテ聖書ノ講義ヲ為ス

五時比ヨリ三好氏ノ家ニテ観桜ノ親睦会アリ但シ森氏ノ招待

ニ依ル夜九時過キ帰宅ス

同廿日 水 晴

午前在宅

午後浅草ノ小川氏ノ宅ヲ訪ヒ夫本郷大学哲学会ニ臨ム夜三好氏ノ講義アリ同氏濟次第フハンシーボールニ臨マレタリ

同二十一日 木 晴

午前在宅午後二時粟津氏宅ニテ婦人ノ集アリ夫ヨリ江口氏ニ至リ教ノ話ヲ為ス

夜祈禱会アリ

同二十二日 金 雨

午前在宅

夜番町ノ集ニ臨ム管ナリシガ平河町桂氏ヨリ夕飯ノ案内アリシヲ以テ之ニ參ル但シ千代モ臨ム管ナリシモ耳痛ニテ会スル能ハサリシ

同二十三日 土 晴

此日終日在宅六合ノ原稿ヲ認ム

同二十四日 日 晴

番町ニテ基督教ノ秘義ト云フ題ニテ説教セシモ準備甚タ十分ナリシ故甚タ不出来ナリシ夫ヨリ靈南坂会堂ニテ説教ス

午後仲之町会堂ニテ講義ス但シ此ヲ以テ今回ノ終ト為ス他日支度ヲ為シ再ヒ之ヲ始ムベシ

夜番町ニテ説教ス

同二十五日 月 晴

午前在宅

午後拙宅ニテ年会準備ノ相談ヲ為ス海老名、和田垣、三好、岡田、杉山、湯浅、高橋、山崎、木全ノ十氏来会シ六日ニ清風亭ニテ饗応スルコトニ決ス

夜三好氏ニ至リシモスピネル氏来ラサリシ

同二十六日 火 晴

午前在宅午後四時ヨリ野村氏ニテ講義ヲ為シ夜丹羽氏ニテ説教ス

同二十七日 水 晴

午前在宅

午後桂氏ニテ講義シ夜三好氏ニテ聖書ノ会説ヲ為ス講義後雜談ヲ為スコト多シ此レ宜シカラサル風習ナレバ爾來之ヲ謹ムベシ

同廿八日 木 晴

午前在宅

午後七時半ヨリ祈禱会アリ後受洗者十余名ノ試験ヲ為ス

同廿九日 金 晴

午前在宅宮川氏始メ数十名ノ代員上京ス

夜番町ノ祈禱会アリ

同三十日 土 雨

午前在宅

午後ヨリ上京代員諸氏ノ相談会ヲ自宅ニテ催フス今回原案中

最モ重ナルモノハ教会合一ノ件是ナリ

五月

五月一日 日 晴

午前九時番町ニテハ金森兄説教ス同十時半靈南坂会堂ニテハ

阿部兄説教ス兩所集ルモノ平常ノ如シ

夜靈南坂ニテハ長田時行兄説教ス余ハ少シク齒痛ヲ覺ヘシヲ

以テ出会セサリシ

同二日 月

本日網島氏ヲ始メトシ多クノ代員諸氏上京ス

同三日 火

午後二時ヨリ会堂ニテ代員諸氏ノ相談会ヲ催フス一致組合兩

会合併并ニ議事下相談ヲ為ス

夜丹羽氏宅ニテ講義ヲ為ス

同四日 水 晴

午前九時ヨリ会堂ニテ祈禱会十時ヨリ議會宮川氏ハ撰マレ事務委員ノ報告及教会一致ノ件ニ付討議ヲ為シ後チ合併起草委員四名ヲ撰挙ス

宮川金森伊勢小峯ノ四氏当撰ス余事情アリテ之ヲ辞退セシヲ以テ次点ノ松山氏撰ニ当ル右四名ニ外國宣教師一名ヲ加ヘ五名ノ委員ヲ以テ一致教会ノ委員ト共ニ協議

原案ヲ起草セシム宣教師ニハグリーン氏撰ニ当ル

午後二時ヨリ議事ヲ開キ五時前閉会夜教会報告会アリ

同五日 木

午前九時ヨリ祈禱会九時半ヨリ會議伝道委員ノ報告并ニ伝道

議案ノ討議アリ

昼原案起草委員諸氏ト共ニ午飯ヲ喫ス

午後二時ヨリ伝道者ノ報告会アリタリ頗ル有益ナル会ナリシ

午後ハ議會ノ答ナリシモ委員會アルヲ以テ議長始メ数名ノ議員不參ナルヲ以テ夜ニ延ハシタリ

夜伝道事件ノ議會アリタリ

同六日 金 曇

午前九時ヨリ祈禱会九時半ヨリ起草委員ノ原案ニ基キ議會ヲ

開キ其大意ヲ是認スルコトニ決ス

午後二時一同聖晚餐ヲ守リ三時過キヨリ山王清風亭ニテ代員

諸氏ノ親睦会ヲ開ク夜番町ニテ祈禱会アリ頗ル熱心ナル会ナ

リシ

同七日 土 雨

午前九時ヨリ厚生館ニテ同盟会ノ祈禱会アリ余司会ス十時ヨリ井深梶之介氏歓迎ノ演説ヲ為シ村上俊吉氏之カ答詞ヲ為ス同午後二時ヨリ議事ヲ開キ議長副議長ヲ撰挙ス同三時過キヨリ懇談会アリ田村氏發議ヲ為ス

同八日 日 晴

午前九時番町ニテケ―レ―氏説教靈南坂ニテ原田氏説教午後二時靈南坂ニテ大説教会アリ新原デフオレスト宮川金森ノ四氏説教ス聴衆堂ニ満チ開会前入場ヲ謝絶スルニ至ル実ニ本会堂建築以來ノ盛会ナリト謂フベシ説教ノ前後オルチン氏二回ノ唱歌ヲ為ス

夜番町ニテハ長田時行氏説教靈南坂ニテハ辻本間川本三氏ノ説教アリ聴衆昼間ヨリ少シ

同九日 月 雨

午前九時ヨリ祈禱同十時ヨリ同盟会ノ議事ヲ開ク  
午後二時ヨリ懇談会アリ星野小方ノ兩氏發議ヲ為ス夜伊勢兄ノ説教平岩稲垣ノ兩氏聖餐ノ式ヲ司ル

同十日 火 雨

午前九時ヨリ祈禱会十時ヨリ議事午後二時ヨリ海老名山田二氏ノ發議ニテ懇談会アリ杉山氏方ニテ夕飯ノ饗ニ与リ夜一致会大会ニ臨ミ其模様ヲ見ル

同十一日 水 曇

午前八時ヨリ祈禱会九時ヨリ議事  
午後二時ヨリ説教会アリ靈南坂会堂ニテハ組合教会ノ総会ヲ

開キ教会合併ノ事件ヲ議ス  
夜又(以下空白)

五月廿八日 靈南坂会堂ニ教会ノ相談会ヲ催フシ辞表ヲ出シ同会ヲ辞シ専ハラ番町教会ニ尽力スルコトニ決ス

(六月)

六月十六日 木 晴

中番町七番地ニ転宅ス兩教ノ兄弟等來リテ之ヲ助ク

同十八日 土 晴

麻布粟津氏宅ニテ送別ノ会アリ大西氏謝辭ヲ述ヘ余之ニ答辭ヲ為ス

同十九日 日 晴

番町教会ニテ十六名ノ受洗アリ後聖晚餐ノ式ヲ守ル  
此日本郷金助町ノ講義所ニテ大学生徒ニ有神論ヲ講述ス

同廿日 月 雨

大学哲学会ニ於テ有神哲学ヲ講ス

同二十二日 水 晴

富士見軒ニテ森春吉氏ノ饗応ヲ受ク

同二十五日 土

講義ノ支度ヲ為スニ当リ大ニ感情ヲ起セリ即チ此マデノ怠ヲ  
悟リシコト此ナリ

同二十七日 月 雨

番町及靈南坂両所ニ説教ス両所共大ニ精神ノ乏キヲ感シタリ  
夜ノ説教ハ昼間ニ比スレバ稍勝レルカ如シ此日ハ亡父ノ十九  
年ノ回日ナリシ

同二十七日 月 晴

本日ヨリ会堂ニ来リ祈禱勉学スルコトニ定ム熟一身ノ心事ヲ  
回想シ大ニ此数月来ノ不足ヲ感セシコトアリ第一ハ不勉強第  
二ハ遷延スルノ僻第三決断力ニ乏キコト第四勇氣乏キコト之  
ニ加ヘテ尤モ不足ヲ感シタル祈禱ヲ怠リシコトナリ余ヤ此等  
ノ不足ヲ感シ之ヲ改メントシタルコト此迄幾回ナルヲ知ラズ  
而シテ一時大ニ感激シ頗ル奮興スルコトアルモ暫クニシテ亦  
弛メリ此カ余カ尤モ薄弱ナル所ナリ今ヤ余手ニものあらず唯  
大能ノ神ノ祐助ヲ仰クノミ願クハ神ヨ此無益荏弱ナル僕ヲ扶  
ケ給ヘ

午後二時聖書ノ会読ヲ為シ夫ヨリ小池宅ニ行キ講義ヲ為シ夜

三好宅ニテスピ子ル氏ノ講義アリ

同廿八日 火 晴

午前五時ニ起キ宮崎氏ノ旅館ニ行キ同氏カ国ニ帰ルヲ送レリ

同二十九日 水 曇

米人ウ井デン氏来リ訪フ氏ト共ニ大学ヲ觀ル

同三十日 木

〔日付のみ〕

二十年三月十三日仙台アフォレスト氏宅ニテ相談会ヲ開キシ  
時左ノ人々ハ伝道ニ従事スルナランノ言ヲ聞ク

○松尾 敬吾

○安藤乙三郎

馬 真鍋 定造

場 藤田 愛二

種 堀 正義

太 ○上原権太郎

郎 ○加藤 壽

明治二十年三月十三日

宮城教会

足立 琢哉

横田 勝治

白石 村治

〔裏表紙〕

祭司長

東京赤坂榎坂町

小嵯弘道

〔表紙〕

明治二十年八月

六合舎主人

『日誌 第五』

八月

八月二日 火 午後麻布粟津氏宅ニテ杉山氏ノ結婚式アリ其司

会ヲ為ス

同三日 水 晴

午前六時ヨリ一家族打ツドヒ房州ニ行キ〔以下空白〕

明治廿年

九月十五日

九月十五日 木 晴

午前八時過キヨリ会堂ニテ読書校正ヲ為ス池本吉十郎氏ヲ本日ヨリ依頼シ種々事業ノ手伝ヲ為サシム

午後二時半ヨリ夫婦ニテ母ヲ病院ニ送ル母ハ八月十二日故郷熊本ニ帰リシカ九月廿六日ニ帰京セシニ甚タ疲労シ何モ為ス能ハサシカハ如何ナル事ナラント氣遣ヒ医師ニ診察ヲ乞ヒシ岩佐氏ハ之ヲ子宮ガント監定セリ遂ニ橋本氏ノ治療ヲ乞フコトニ決シ本日赤十字社ノ病院ニ入院ヲ乞フニ至レリ

夜共存同衆ノ会ニ臨ミ十時過キ帰宅ス

余性怠惰遷延無益ニ時間ヲ費ヤスコト多シ今度ヨリ日課ヲ定メ之ヲ決セント欲ス願クハ神ヨ余ヲ祐ケ此日課ヲ守ラシメ其大任ヲ尽サシメ給ハンコトヲ

同十六日 金 晴

午前身氣甚ク衰頹シ格別何事ヲモ為スコト能ハサリシ十時ヨリ池本氏来リ共ニ少々ノ事務ヲ為ス

グリーン氏京都ヨリ着ス

暫時話ヲ為シテ横浜へ来ル

午後二時比赤十字社病院ニ至リ母ヲ見舞フ夫ヨリ哲学館ノ開校式ニ臨ム井上氏立テ開校ノ趣意ヲ述ヘ夫ヨリ棚橋辰巳外山加藤ノ諸氏交ルヽ立テ祝辞ヲ述ヘ夫ヨリ茶菓ヲ饗ス四時過

キ閉会

夜祈禱会アリ集ルモノ多カラズ偏ニ聖靈ノ恩祐ヲ祈ラサル可

ラス

同十七日 土 曇

午前在宅午後病院ニ行テ母ヲ見舞フ

同十八日 日 曇

午前会堂ニテ説教集ルモノ凡百人

午後唱歌ノ稽古アリ

夜雨説教アリ集ルモノ朝ヨリ少シ

同十九日 月 曇 雨

午前在宅

午後小池氏ニ行キ夜丹羽氏ニ行ク



同廿日 火 曇 雨

午前在宅午後母ヲ見舞フ

夜会堂ニテ質問会ヲ開ク昼野村氏ニテ聖書ヲ講ス

同廿一日 水 雨

午前会堂ニテ常務ヲ行フ 午後母ヲ見舞フ

夜三好氏ニテ聖書ヲ講ス

同廿二日 木 曇

午前グリーン氏来リテ共ニ牛込ニ行イテ地所ヲ見ル

午後一時ヨリ病院ニ行ク同三時比ヨリ手術ヲ行フ

夜千代独リ病院ニ止ル余ハ森氏へ行テ教ノ話ヲ為ス

同廿三日 金 晴

午前和田垣氏ヲ訪フ

午後警醒社湯浅ヲ廻ハリ病院へ行テ帰ル

夜祈禱会アリ母ノ為メニ祈るもの多し

同廿四日 土 曇

午前会堂ニテ編輯ニ従事ス

四時過キヨリ丹羽氏宅ニテ姪女結婚ノ弘メアリ

夜湯浅氏宅ニテ新島氏等ト伝道ノ相談ヲ為ス

同廿五日 日 曇

午前会堂ニテ説教ス

午後四時ヨリ本郷講義所ニテ大学生徒ノ為メニ講義ス

夜三好氏宅晩飯ヲ食シ夫会堂ニテスピリル氏ノ講義ヲ聞ク

同廿六日 月 曇

午前休

午後湯浅氏ニテ新島先生ニ逢ヒ夜誕生祝ノ為メ森氏ニ行ク

同廿七日 火 晴

午前在宅

午後病院ニ行テ母ヲ見ル夫ヨリ野村氏ニ行イテ聖書ノ講義ヲ為ス

夜質問会ヲ開ク集ルモノ七八名アリタリ

同廿八日 水 晴

午前在宅六合ノ原稿ヲ認ム

午後警醒社ヨリ本郷伊勢氏ニ至リ相談会ヲ開ケリ手紙ノ間違

ニテ新島グリーンノ両氏来ラズ

夜三好氏ニテ会説ヲ為ス

同廿九日 木 曇

午前在宅六合ノ原稿ヲ認ム

午後病院へ至リ夫ヨリ小池氏ニ至リ聖書ノ会説ヲ為ス

同三十日 金 曇

午前ヨリ横浜へ行キグリーン氏ニ逢ヒ夫ヨリ新島先生ヲ船ニ

送ル

夫ヨリスカツタル氏ヲ問ヒ午後四時ノ汽車ニテ帰宅ス

夜会堂ニテ祈禱会アリ

十月

一日 土 雨

午前在宅基督教新聞ノ原稿ヲ認ム

午後四時ヨリ病院ニ之キテ見舞フ

同二日 日 雨

午前説教集ルモノ凡九十人

昼三好氏ノ饗ニ与ル

夜又説教ス

同三日 月 雨

午前警醒社へ行テ事務ヲ整頓ス

夫ヨリ病院へ行ク

午後六時ヨリ森氏ノ生誕ノ祝アリ夫ヨリ朽木氏へ行ク

同四日 火 雨

午前会堂ニテ事務ヲ為ス

午後グリーン氏来テ地所契約ノ事務ヲ為ス

四時ヨリ野村へ行キ会説ヲ為ス

夜質問会アリ

同五日 水 大雨

午前東京ホテルニ行キスカツダル氏夫婦ヲ見ル同氏ノ一行ハ

同日午後新瀉へ向テ出発セリ

午後大雨ニテ在宅

夜三好氏宅ニテ会堂新築ノ相談ヲ為セシモ異説多クシテ纏ラ

ズ十一時過キ帰宅ス

同六日 木 曇

午前登記所へ(行)ク夫ヨリ病院ニ行ク

午後佐藤中川ノ両氏佐藤氏不在ナリシ夫ヨリ小池氏へ行キテ

聖書ノ会説ヲ為ス

同七日 金 雨

午前在宅

午後基督教新聞原稿ヲ認ム

夜祈禱会ニテ受洗者ノ信仰ヲ質問ス

同八日 土 雨

午前在宅説教演説ノ支度ヲ為ス

午後二時ヨリ靈南坂会堂ニテ青年会ノ演説アリ余キリスト教

ト文明ト云フ題ニテ演説ス夫ヨリ日吉町青年会ノ集リニ会ス

同九日 日 曇

午前説教聖晚餐九名ノ受洗アリタリ

後オルガン買入ニ付相談ス午後病院へ行ク

夜スピン子ル氏ノ講演アリ

同十日 月 晴

午前オルチン氏ヲ訪フ

午後警醒社ノ総会アリ議案ヲ議決シ左ノ五氏委員ニ当撰ス

湯浅治郎 秦吞舟

本多庸一 井深梶之介

小崎弘道

夜朽木氏ノ集ニ行ク

同十一日 火 晴

午前在宅

午後病院へ行キ夫ヨリ野村氏へ行ク筈ナリシ処断ナリシヲ以

テ更津田梅女ヲ訪ヒタレド留主ナリシ夫ヨリ奥村氏ヲ訪ヒ六

時比帰宅ス

夜例ノ通り会堂ニテ質問会ヲ催フセリ

同十二日 水 晴

午前在宅

午後三好氏宅ノ集ニ会ス

同十三日 木 晴

午前橋本氏ヲ訪フ

午後小池氏集ニ会ス

同十四日 金 晴

午後警醒社ヘ行ク夜ハヘリング氏ノ〔以下空白〕

同十五日 土 晴

午後青年会ノ集アリ夫ヨリ共存同衆ノ集ニ行ク

同十六日 日 雨

午前説教午後病院ヲ訪フ夜又説教ス過日少シク、脳悪シク為メ

ニ其説教モ甚タ不十分ナリシ

同十七日 月 曇

午前在宅午後築地女学校ヘ行キ夫ヨリ千歳ヘ行キ松山森岡氏

ノ送別会ニ会ス

同十八日 火 晴

午前在宅夫ヨリ橋本氏ヲ訪フ午後〇時三十分八官町本多氏ト

右岡氏ノ送別会ニ会ス

夜会堂ニテ質問会アリ千代病院ニ滞ル

同十九日 水

午前在宅

午後病院ヘ往キ母ヲ見舞フ

夜三好氏ノ集リアリ

同廿日 木 晴

午前在宅午後病院ニ往ク此日母ノ治療アリ六時過キニ終ル

今回ハ頗ル疲労セリ

夜三好氏ノ招ニテ富士〔見〕軒ニテ饗応アリタリ十時比帰宅

ス

此夜千代病院ニ泊ス

同廿一日 金 晴

午前在宅午後警醒社ニ行キ夫ヨリ病院ニ回リテ帰ル繼憲十九

日ヨリ出京シタルガ本日高崎ニ帰ル夜折禱会アリ集ルモノ常

ヨリ多シ千代今夜亦病院ヘ一泊ス

同廿二日 土 晴

午前在宅

午後鶴飼氏ヲ訪ヒ夫ヨリ病院ヘ行ク

同廿三日 日 晴

午前九時説教集ルモノ凡ソ百二十名近来ノ盛会ナリシ

午後二時ヨリ病院ヘ行キ夫ヨリ本郷金助町講義所ニ行キ大學

生ノ為有神論ヲ講ス

夜スピソル氏ノ講義アリタリ

同廿四日 月 晴

午前区役所ヘ行キ地券ノ書換ヲ為シ夫ヨリ会堂ニテ六合ノ原

稿ヲ整理ス

午後病院ヘ行ク

夜丹羽氏宅ニテ集リヲ為ス

同廿五日 火 晴

午前六合原稿整頓夫ヨリ五六名ノ質問者来訪ス

午後独逸ノ稽古ヲ為ス夫ヨリ野村氏ヘ行キ聖書ノ会説ヲ為ス

夜質問会ニハ来ルモノ六七名アリ

同廿六日 水 晴

午前在宅 午後病院ヲ見舞フ母ノ病氣別ニ変ルコトナシ

夜三好氏ノ会説ヲ為ス

同廿七日 木 晴

午前十時ヨリ警醒社ヘ出ツ夫ヨリ松山兄ヲ問ヒ夫ヨリ本村兄

ト共越後屋ニ行キ洋服ノ注文ヲ為ス

帰り道病院ヘ立チ寄り小池氏宅ニ至リ聖書ノ講義ヲ為シ夫ヨ

リ早稲田専門学校ヘ之キ演説ヲ為シ午後八時比掃宅ス

同廿八日 金 晴

午前在宅ナリシモ茫然トシテ格別ノ事ヲ為ス能ハサリシ

午後病院母ヲ見舞フ

夜ヘリング氏ノ講義アリタリ

同廿九日 土 雨

午前在宅基督教新聞社説ヲ認ム

午後病院ニ往キ母ヲ見舞フ今日ハ少シク宜キガ如シ

夜招魂社内ヲ逍遙シ話ノ支度ヲ為ス横浜ノ母婦人祈禱会ノ為

メ来ル

同三十日 日 晴

例刻ヨリ説教集ルモノ常ノ如ク多シ夫ヨリ吉岐坂スピenson子

氏会堂ニテ献堂式ニ臨ミ聊カ感スル所ヲ述ヘタリ

夜会堂ノ説教ハ聴衆モ可ナリニ多ク幾分益スル所アリシカ如

シ

同三十一日 月 雨

午後〔前〕在宅午後警醒社ヘ行キ事務ヲ為シ夫ヨリ湯浅氏ヲ

訪ヒ病院ヘ廻リテ帰ル

夜朽木氏ノ集リアリタリ

十一月

十一月一日 火 雨

午前在宅午後独逸学ノ稽古ヲ為シ夫ヨリ野村氏宅ニテ聖書ノ

会説ヲ為シ夜質問会ヲ催フス集ルモノ甚タ少シ

同二日 水 晴

午前岡部氏葬式ニ会ス

午後大学運動会ヲ観ル

夜三好氏ノ集アリ

同三日 木 晴

天長節ニ付キ常務ヲ休ミ朝銀座マデ千代ノ時計ヲ取りニ行ク

午後三好兄弟及坂田氏ト築地ニ行テ舟遊ヲ為ス

夜石橋氏宅ヲ訪フ

同四日 金 晴

午前警醒社ニ行キ午後ヨリ徳富氏ト共ニ營了法氏ヲ訪フ帰路

病院ヘ立寄ル

夜祈禱会アリ

同五日 土 雨

午前在宅説教ノ支度ヲ為ス数人ノ来客アリタリ

午後明治女学校献堂式ニ至ル夫ヨリ同志社同窓会ニ会シ築地  
林氏婚姻式ニ臨テ帰ル

同六日 日 雨

午前会堂ニテ説教聴衆例ノ如シ夫ヨリ靈南坂会堂へ行キ説教  
ス受洗男女小児合セテ九名アリ聖晚餐アリ聴衆凡ソ百七十八  
人ト見受ケタリ

午後本郷金助町講義所ニテ説教ス夫ヨリ病院へ立寄りテ帰宅  
ス

夜会堂ニテスピンチル氏ノ説教アリ聴衆例ノ如シ

同七日 月 雨

午前在宅午後警醒社ニテ委員会ヲ開ク

夜丹羽氏ニテ講義ヲ為ス

同八日 火 曇

午前在宅午前〔後〕病院へ行キ夜会堂ニテ質問会ニ集リタル  
モ相談会アリタルヲ以テ止メタリ

同九日 水 晴

午前橋本氏ヲ訪ヒタリ

午後千代ト共招魂社ヲ參觀ス

夜三好氏ノ宅ニテ講義ス

同十日 木 雨

午前警醒社へ出ツ

午後五時ヨリ早稲田専門校へ行キ演説シ夜九時前帰宅ス

同十一日 金 曇

午前在宅

午後靈南坂〔教〕会牧師解任式ニ赴ク上州ヨリ杉田、茂木、

半田、松本、深沢、斉藤ノ諸氏来テ式ヲ助ケ杉田兄勸メヲ為  
ス教会ヨリ写真折一ツト金三円五拾錢ニ添書ヲ付テ贈送シ来  
ル実ニ感謝スヘキコトナリ会終テ晩食ノ饗ニ与ル

夜七時番町ニテヘリンク氏講義濟テ就任式ノ相談会ヲ開ク

同十二日 土 晴

午前基督教新聞ノ社説ヲ認ム

午後二時ヨリ就任式并老年祝会アリ集ルモノ凡ソ二百名頗ル  
盛会ナリシ

右終テ土州人ノ設ケタル富見クラブニテ親睦会ヲ開ク種々ノ  
遊戯ヲ為シテ午後八時比退散ス

同十三日 日 晴

午前番町ニテ説教集ルモノ例ノ如シ青山ヨリ信徒三名来テ聖

靈恩化ノ説ヲ為ス

午後病院ヲ見舞フ

夜五時三好氏宅小児日明キノ祝会ニ招カル

夜杉田氏説教

同十四日 月 晴

午前在宅新聞原稿ヲ認ム夫ヨリ警醒社ニ到ル

午後森氏ヲ訪フ夫ヨリ青山学校ニ至リ祈禱会ニ臨ム

夜朽木氏宅ニテ講義ヲ為ス

同十五日 火 晴

午前借家穿索ノ為メ其大部ヲ費ヤス本多氏来テ牧師伝道師ノ  
相談会ヲ開カンコトヲ計ル是レ昨日余ヨリ其話ヲ為シタレバ

ナリ

午後野村氏ヲ訪フタレド差支ニテ面会セズ夫ヨリ警醒社ニ到

リ又共存同衆ノ会ニ出席ス

夜質問会ニ多クノ人出席ス

同十六日 水 晴

午前六時半ヨリノ祈禱会ニ出席人甚タ多ク祈禱甚タ盛ニナレ

リ

今日下ニ番町三十番地ニ転宅ス午前午後之カ為メ費ス屋賃九

円五十銭

夜三好氏集リアリ

同十七日 木 曇

午前祈禱会甚タ盛ナリ

母退院ノ為メ朝ヨリ病院ヘ行キ昼過キ帰宅ス病氣異状ナシ

同四時比ヨリ牛込小池氏方ニテ聖書ノ講義ヲ為ス

夜神田今川小路メソテスト会堂ニ説教ス頗ル盛会ナリ

近頃著シキ聖靈ノ恩化処々ノ教会ニ現ハル実ニ感謝スヘキコ

トナリ願クハ此恩化ヲ我教会ノ上ニモ加ワヘ給ヘ

同十八日 金

新聞原稿ヲ認ム

夜祈禱会アリ集ルモノ多ク頗ル盛ナリ本夜ヨリ迄週間連夜説

教ヲ始ム

同十九日 土

午前説教ノ支度ヲ為ス

夜祈禱会前日ノ如シ

府下伝道師牧師ノ相談会ヲ開ク

同廿日 日 晴

今ハ恵ノ時今日ハ救ノ日ナリトノ言ヲ以テ説教ノ題ト為ス

午後四谷中村氏宅ニ於テ講義ヲ為ス之ヨリ毎日曜日ニ説教ヲ

開クコトニ決ス

同夜スピソ子ル氏ノ講義アリ

同廿一日 月

午後青年会館ニテ伝道師牧師ノ祈禱会ヲ開ク

夜祈禱会アリ平常ノ如シ

同廿二日 火

午前厚生館ニテ説教ス福音ノ催シニテ祈禱会ヲ兼ネ甚タ有益

ナル会ナリシ

同廿三日 水 晴

本日新嘗祭休暇ニテ靈南坂会堂ニ於テ親睦会アリ夫婦之ニ臨

ミ夫ヨリ芝ヘ回リテ厚生館ニ至ル杉山兄等之ニ臨ムコトヲ好

マサリシカド無理ニ勸メシニ之ニ臨ミ頗ル利益ヲ得ラル

夜祈禱会アリ大ニ振フ感スルモノ少カラズ明晩各客員ヲ伴テ

之ニ臨ムヘキコトヲ約ス

同廿四日 木 晴

午前在宅午後二三ノ信徒ヲ見舞フ夜祈禱会ニハ会スルモノ甚

タ多ク甚タ盛ナル会ナリシ

同廿五日 金

夜ベリソ氏ノ講義アリ後チ各感話ヲ為ス

同廿六日 土 晴

午前在宅午後一時ノ汽車ニテ横浜ヘ行ク説教ス精神甚タ乏キヲ覺フ

同廿七日 日 晴

聖靈ニ満サルベシトノ題ニテ説教ス午後四谷ニ行テ説教ス

夜会堂ニテ説教本夜ヨリ杵週間連夜説教会ヲ開ク集ルモノ頗ル多シ

同廿八日 月 晴

午前六合雜誌ノ原稿ヲ認ム

午後役者ノ祈禱会アリ

夜緒方仙之介氏説教ス

同廿九日 火 晴

午前榑部氏ノ葬式ニ会ス午後独逸語ノ稽古ヲ為シ夫ヨリ野村

氏ニテ講義ヲ為シ夜稲垣氏ノ説教アリタリ

同卅日 水 晴

午前在宅夜余説教ス

十二月一日

一日 木 晴

午前在宅午後小池ニ行ク余ハ青山メソテスト教会ニ行イテ説

教ス会堂ニテ石寄氏説教ス

同二日 金 晴

午前在宅夜余説教ス

同三日 土 晴

午前在宅夜説教ス連夜ノ説教今夜ヲ以テ了リトス悔改ムルモ

ノ数名起レリ実ニ感謝スヘキコトナリ

同四日 日 晴

爾曹ハ此等ノ事ノ証人ナリトノ題ヲ以テ説教ス

午後四谷ニテ説教ス大ニ感スルモノアリタルガ如シ

夜スピントル氏説教

同五日 月 晴

午前新聞ノ原稿ヲ認ム

午後役者ノ祈禱会アリタリ

夜六時ヨリ有志者ノ祈禱会アリ夫ヨリ丹羽氏宅ニテ説教ス

同六日 火 晴

午前在宅午後独逸ノ稽古ヲ為シ夫ヨリ野村氏ニ行キタルモ留

守ニテ逢ハサリシ

夜祈禱会アリタリ

同七日 水 晴

午前在宅夜祈禱会ヲ為シ夫ヨリ三好氏ノ宅ノ講義ヲ為ス

同八日 木 晴

午前在宅午後警醒社ヘ行キ夫ヨリ小池氏ニ行キ夜祈禱会ニ臨

メリ

同九日 金 晴

午前在宅午後外出

夜祈禱会夫ヨリヘリング氏ノ講義アリタリ

明治廿一年二月

二月一日 水 曇

昨年暮以来多忙ノ事多ク且ツ怠リテ日記ヲ付ケサリシガ諸事不順序ニ至レル多キヲ覺フ本日ヨリ改メテ日記ヲ付クルヲ初メ且ツ此ヨリ諸事ニ順序ヲ立テ大ニ勉勵セシコトヲ期ス

一月三十日五時過キ千代ト共ニ家ヲ立テ第壹ノ汽車ニテ上州富岡ニ至リ午後三時岩間もよ女ノ結婚式ニ立逢ヒ夜同所ニテ杉田兄ト共ニ説教ス聴衆百余名但シもよ女ハ斉藤寿雄氏ノ媒約ニテ伊勢崎近傍小学教員加藤元吉氏ト結婚セシナリ三十一日磯部ヲ經テ原市ニ至リ同所ニテ説教ス夜安中ニテ説教ス安中ニハ植村氏モ説教ス

今朝午前十二時発ノ汽車ニテ植村氏ト共ニ帰宅ス

二日 木 晴

午前在宅

午後警醒社へ行キ一月ノ勘定ヲ調ヘタルニ七十円余ノ不足ヲ生シタルヲ以テ大ニ当惑セリ夫ヨリ小池氏集リニ行キ夜三好氏ニテ安息日学校教員ノ集アリタリ

三日 金 晴

寒気昨ヨリ甚シ午前在宅午後二時ヨリ警醒社へ行キ夫ヨリ

旧約聖書落成ノ祝会ニ臨ム

夜教会堂増築ノ奉堂式アリ集ルモノ凡ソ二百五六十名頗ル盛会ナリシ

四日 土 雪

午前在宅午後ハ伊勢湯浅ノ両氏来リ種々伝道并教会一致ニ付相談ス夜洗礼志願者ノ試験ヲ為ス

同五日 日 曇

午前新会堂ニテ説教ス集ルモノ凡ソ百五六十名午後四谷中村氏宅ニテ講義ス

夜スピントル氏ノ説教アリ

同六日 月 曇

午前来客ノ為メニ時間ヲ費ス

午後警醒社ニ行キ一月分ノ計算ヲ終完ス夫ヨリ駿河台榎村氏病院ニ至リ草間氏令室ノ病氣ヲ見舞フ夫ヨリ小川町ニテ買物ヲ為ス夜青年会森三好木全ノ三氏ヲ訪ヒ夫ヨリ丹羽氏ニ至リ講義ヲ為ス

同七日 火 雪

午前七時半過家ヲ出テ八時十五分ノ汽車ニ横浜ニ至リ蓬来家ニ着シ十二時出帆ノ薩摩丸ニテ横浜ヲ発ス海上至テ平穩ナリシ

同八日 水 曇

午前七時過キ出寝日中同行ノ諸氏ト共ニ甲板上ヲ遊歩シ午後六時前無事神戸ニ着ス此行同行七人教会一致草案委員会ヲ大坂ニ開クガ為メナレバ頗ル愉快ナル旅ナリシ蓬来家ニ宿ス

同九日 木 晴

午前八時ノ汽車ニテ大坂ニ行キ同九時半過ヨリ川口フ井シヤル氏方ニテ委員会ヲ開ク西京ヨリ松山金森ラル子ツトノ三氏神戸ヨリアツキンソン氏長崎ヨリ瀬川氏都合十七名ニテ会ヲ



開ク但シ湯淺海老名グリナンノ三氏欠席セリ宮川氏ヲ議長ニ  
伊勢氏ミラル氏ヲ書記ニ撰挙ス十二時閉会

午後二時開会再ヒ会議ヲ開ク此日第一二三四章ヲ議了ス

夜又會議ヲ開ク管ナリシモ一同疲労セシヲ以テ休会セリ

同十日 金 晴

午前九時ヨリ開会二時ヨリ又夜七時半ヨリト都合三回開会ス

同十一日 土 晴

午前九時ヨリト午後二時ヨリト二回開会ス議事大ニ抄リ懲戒  
マデニ及ブ

同四時二十五分ノ汽車ニテ伊勢金森ノ両氏ト共ニ京都ニ上リ

当夜新島氏ニ投ス

同十二日 日 雪

午前九時ヨリ同志社礼拝堂ニテ説教ス聴衆凡ソ六百人立雖ノ  
地ナシ此堂新築以來初テ此ニ来ル夫ヨリ金森氏宅ヲ訪ヒ同志  
社教員諸氏ト同志社将来ノ事ニ付相談ス

午後三時再ヒ礼拝堂ニ至リ安息日学校生徒ノ為ニ談ヲ為ス夫  
ヨリ平安教会ニ至ル其会堂モ稍大ニシテ二三百人ヲ容ルベシ  
夜又礼拝堂ニテ伊勢兄ト共ニ説教ス夫ヨリ四条教会ニ行テ説  
教ス此夜頗ル疲労ス夫ヨリ同志社社員ノ相談会ヲ開キ米國ニ  
テ資金ヲ募ルコトヲ議決ス

同十三日 月 晴

午前六時四十五分第巻ノ汽車ニテ大坂へ下ル

九時半ヨリ委員会ヲ開ク

午後二時ヨリト七時半ヨリト二度開ク此夜十時比ニ至テ一先

ツ原案ヲ議了ス午後ノ会ニテ第三会原案整頓ヲ五名ノ委員ニ  
委托ス其委員ハイムブリーラル子ツド井深植村小崎ノ五人ナ  
リ此委員ハ規則ノ文章ヲモ校正スルコトヲ委托セラル

同十四日 火 晴

午前九時ヨリ開十一時過キニ至テ一応其原案ヲ議了ス夫ヨリ  
委員ノ写真ヲ採ル而シテ江戸安ト云フ西洋料理ニ行テ共ニ洋  
食ヲ喫ス

午後三時再ヒフ井シヤル氏方ニ帰テ午前議シ残シタル分ニ付  
議決ス

各ノ五委員文章ヲ校正シ之ヲ出版シ之ニ報告文ヲ添ヘ諸教会  
ニ分チ一致会ニテハ先臨時大会ヲ開キ組合ニテハ夫ノ儘ニシ  
来十月ヲ期シ双方其大会ヲ大坂ニ開クコトヲ約ス

夜イムブリー氏ト共オルチン氏方ニテ晩食ヲ喫ス

同十五日 水 晴

午前九時ヨリ文章委員ノ会ヲ開キ十時比ニ散ス

此会タルヤ終始都合ヨク運ヒタルハ偏ニ主ノ恩寵ニヨルト深  
ク感謝セサル可ラス

十時二十分発ノ汽車ニテ神戸ニ下ラントテステーションニ至  
リシニ忽チ本日出帆ノ船明日ニ延引セシヲ見ル夫ヨリ引キ却  
ヘシ福音舎ニ至リ警醒社ノ會計ヲ為シ島ノ内辻氏ヲ問ヒ二時  
二十分ノ汽車ニテ神戸ニ下ル

此夜多聞会堂ニテ説教会ヲ催フセシヲ以テ行テ説教ス安藤氏  
ニ宿ス

同十六日 木 曇

午前九時ヨリアツキンソン氏ヲ訪ヒ古荘氏ヲ訪ヒ原田氏ヲ訪  
テ諸氏ニ面会シ種々話ヲ為ス

午前十一時過キ横浜丸ニ乗船ス十二時出帆日暮ニ至リ降雪ア  
リ

中等大ニ困難セシヲ余ト熊野ノ二人上等室ニ移ル

同十七日 金 曇

海上浪穩カナリ五時過キ横浜ニ入港ス

西村屋ニテ入浴晚餐ヲ喫シ八時ノ汽車ニテ帰宅ス着セシハ九

時半比ナリキ家内一同無事喜テ余ヲ迎フ

同十八日 土 晴

夜受洗者ノ試験ヲ為ス

同十九日 日 雨

午前九時半説教十三名ニ洗礼ヲ施シ聖晚餐ヲ守ル集ルモノ凡  
ソ百五十名

午後三時四谷中村氏宅ニテ講義ヲ為ス

夜又説教ス集ルモノ平常ヨリ少シ

同廿日 月 曇

午後二時ヨリ築地神学校ニテ委員ノ集ヲ為ス

夜朽木氏ニテ講義ス

同廿一日 火 曇

午前在宅午後(以下空白)

夜質問会ヲ催ス来ルモノ少シ

同廿二日 水 曇

午後伊勢兄来訪ス夫ヨリ築地神学校ニ至リ委員ノ集ヲ為ス

帰路互ヒニ晚餐ヲ喫ス  
夜三好氏宅ニテ安息日学校教員ノ集ヲ為ス

同廿三日 木 曇

午前在宅午後二時ヨリ丹羽氏ヲ訪ヒ夫ヨリ木全氏ト共ニ大塚  
氏ニ至リ教ノ説ヲ為ス

又小池氏ニ至テ講義ヲ為ス

桃代少々風邪ノ気味故小山氏へ診察ヲ乞ヒシシプテリヤナ  
ルノ恐アレハ注意スヘシトノ事ナリシ

同廿四日 金 曇

午後市川氏ニ行キ色々話ヲ為ス夫ヨリ柳田氏ニ至リ種々教  
話ヲ為ス

帰り来リシニ桃代ノ見舞ニ小西氏来リテ入院スヘシトノ勸メ  
アリシトノ事故早速入院ノ手数ヲ為シテ入院ス

夜祈禱会アリシ後病院ニ至リ様子ヲ見シニ別ニ変リタルコト  
ナシ

同廿五日 土 曇

午後病院ニ至リ様子ヲ見シニ左程悪シクナリタリトモ見ヘズ  
同廿六日 日 雨

朝六時過キ病院ヨリ桃代病悪シ早ク来レトノ使来ル早速起キ  
テ病院ニ至リシニ朝四時比ヨリシテ俄カニ様体変リシトノ事  
ニテ其呼吸甚ク切迫顔色青サメタルヲ見頗ル心痛セリ夫ヨリ  
少シク吐シタリ依テ温湯ニ浴セシメシニ暫クシテ稍元氣付キ  
茶碗一杯許リノ牛乳ヲ飲ミタリ此時ヲモチャ二三品ヲ買テ之  
ニ与ヘシニ或ハ之ヲ手ニ取り或ハ之ヲ放チタリ十時過キ再ヒ

煩悶ヲ催フセリ依テ又温湯ヲ行フ此ヨリ先キ病甚ク切迫セシ  
ヲ以テ咽口切解ヲ行フコトヲ請求セシニ本日ハ休暇ナレバ掛  
医モ少ク依テ人ヲ小山氏ニ使シテ之ヲ招カシム

十二時過愈切解ヲ行フニ決シ其用意ヲ為シ居リシニ二時過キ  
再ヒ様子悪クナレリ依テ医員等早速温湯ヲ行ヒシモ此回ハ已  
ニ其氣力尽キタリシト見ヘ其効ナク三時過没シタリ此時吾人  
ノ愁傷云ハン方ナク姑クノ間ハ何ヲモ為ス能ハサ(リ)シ  
五時過キ其死骸ヲ宅ニ引キ取リタリ

此夜青年会ノ諸氏殊ニ酒井氏ノ尽力ニテ入棺葬式ノ手数ヲ為  
ス

十二時床ニ就ントスルモノ眠ル能ハズ四時過キニ至テ少ク眠  
ル

同廿七日 月 晴

午前九時比始尾好ク入棺ス依テ一同集リテ讚美祈禱ス

余ヤ今回ノ事件ノ如ク其心ヲ感動セシコトナシ感情常ニ胸ニ  
迫テ暫クモ止マズ然シ今尽ク天父ノ此試ヲ与ヘ給ヒシ趣意ヲ  
知ル能サルモ凡テノ事神ヲ愛スルモノノ為ニ働テ益ヲ為スト  
ハ余ノ堅ク信スル所ナリ願クハ神ヨ余及愛妻ニ此ノ趣意ヲ悟  
ラセ給ヘ

午後二時半迄一同讚美祈禱シテ出棺ス三時會堂ニテ葬式ヲ行  
フ植村伊勢ノ兩兄話ヲ為ス

夫ヨリ青山埋葬地ニ至テ葬ル五時過キ終レリ会スルモノ六七  
十人小児ノ葬式ニハ珍シキ葬式ナリシ桃代モ嘸カシ満足セシ  
ナラン

同廿八日 火 晴

終日碌々トシテ何事ヲモ為スコト能ハズ唯多クノ來訪者ニ応  
接セシノミ

同廿九日 水 晴

午前千代ト共墓參ス共ニ無限ノ感情ヲ覺ヘタリ  
午後四時青年會諸士ヲ招キテモ、代ノ為メニ會食ス  
夜三好氏宅ニテ安息日學校教師ノ集ヲ開ク

三月

三月一日 木 曇

午後二時築地神學校ニテ開ケル委員會ニ參會ス帰路警醒社ニ  
立寄計算ヲ見ル

三月二日 金 雨

午前午後在宅來客ニ面會ス

夜會堂ニテヘリンク氏ノ講義アリ

同月三日 土 晴

午前墓參ス祈禱并ニ默念ス

午後警醒社ヘ行キ夫ヨリ明治生命保險會社ニ至リ保險ヲ依頼  
シ帰路湯淺氏ヲ訪フ

生來甚ク不規則ナルカ故事ヲ為スコト少ク且ツ會計表等ニモ  
困却スルコト少カラサレバ今回桃代ノ死ニヨリ万事此等ノ事  
ヲモ改メント欲ス

同四日 日 雨

午前余説教聴衆凡ソ百五十人午後中村氏方ニテ講義ス

夜スピン子ル氏ノ説教アリ頗ル過激ナルモノナリシ  
同五日 月 晴

余等夫婦丹羽ノ令閨ト共ニ午前十二時ノ汽車ニテ上州高崎ニ  
到ル

同夜劇場ニテ説教ス

同六日 火 晴

午前十時高崎西群馬教会組合教会へ加入ノ為メニ相談ヲ開ク  
湯淺氏議長トナリ十二時ニ之ヲ議了ス夫ヨリ委員一同昼飯ノ  
饗ニ与ル

午後二時其式ヲ執行ス伊勢氏ノ説教金森氏ノ勸湯淺氏ノ祝詞  
杉田氏ト余ノ聖晩式ニテ五時比之ヲ終ル

夜前夜ノ所ニテ演説金森氏ノ演説喝采ヲ博ス

同七日 水 晴

午前十時発ノ汽車ニテ前橋ニ至ル先ツ不破氏宅ニ昼食ヲ喫シ

鍋屋ニ宿ス

夜会堂ニテ説教ス

同八日 木 晴

老番ノ汽車ニテ余等夫婦丹羽ノ令閨ト共ニ帰京ス夫ヨリ富士

見軒ニテ島田植村両兄ノ送別会ヲ催フス

夜三好氏方ニテ聖書ノ会読アリ

同九日 金 曇

夜祈禱会アリ植村氏ヲ送ル

同十日 土 晴

午後青年会ノ集アリ

スウィフト氏講演ス  
同十一日 日 曇

金森氏説教ス

午後金助町伊勢氏説教場ニテ説教夫ヨリ講義ス

夜説教ス

同十二日 月 夜丹羽氏ニ行

同十三日 火 晴

午後夫婦墓参ス

夜質問会アリ集ルモノ甚タ少シ此三浦氏ノ送別会ヲ催フス

同十四日 水 曇

午前在宅

夜三好氏ノ宅ニ会ス

同十五日 木 晴

午前在宅

午後草間氏ヲ問ヒ夫ヨリ共存同衆ノ集ニ至リ九時比帰宅ス

同十六日 金 晴

午前在宅午後青山へ墓参且説教ノ支度ヲ為ス

夜ヘリング氏ノ講義アリ

同十七日 土 晴

午前説教ノ支度ヲ為ス

午後(以下空白)

同十八日 日 晴

午前説教ス

午後招魂社ニ至リ帰テ説教ノ支度ヲ為ス

夜説教ス

同十九日 月 晴

午前新聞ノ原稿ヲ認ム

午後警醒社ニ至リ夫ヨリ岩谷氏ヲ訪フ

同廿日 火 晴

午前来客ノ為メニ費ス

午後靈南坂会ノ親睦会ニ出ツ

夜質問会アリ

泉州日根郡自然田村

南歡次郎

油谷次郎七

尾崎村

松井龜太郎

〔裏表紙〕

小峯氏

## 初期の小崎弘道日記について

3 回にわたって掲載した日記より知られる彼の思想と行動について述べる。

これと同時代の日記に、内村鑑三の英文著作 “HOW I BECAME A CHRISTIAN: Out of My Diary By A ‘Heaven Convert’” 1895に断片的に記された日記がある。それは、一八七七年三月の札幌農学校におけるキリスト教受容より八八年五月のアメリカ留学よりの帰国までの彼の生活記録である。いうまでもなく、彼の本意は日記を掲載することではなく、その日記より日本人キリスト者の独自の思想形成の軌跡を論述することであった。それに比べると、小崎弘道の日記は、途中に脱落があるにせよ、一八八〇年一〇月より八八年三月にいたる伝道者、牧師としての行動記録である。それは内村鑑三のような鋭い切れ味はないが、淡々とした記述の中に新旧文明の渦巻く東京という地域社会でキリスト教の弁証に骨身を削っていった彼の足跡を伝えている。その諸活動がキリスト教界に及ぼした影響は、内村の比ではない。

小崎弘道の活動記録を伝えるものに、「余が廿五年の経歴」と「余が信仰の実歴」を収録した『余が廿五年の経歴』（警醒社書店、一九〇五）と『七十年の回顧』（同書店、一九二七）がある。前者は彼の説教であるため、どうしても建徳的になる。後者は彼の回想録であるため、その内容は美化される。いずれも、この日記のような生々しさはない。その意味では、この日記は二十歳代後半より三十歳代初めの彼の思想と行動を伝える最適の資料といえる。

彼の思想に関連したことを述べる。彼の日記を讀んでいくと、彼が自らの性格の怠慢なこと、自らの信仰の薄弱なこと、牧師として不適格なことをしばしば懺悔している箇所に出会う（一八八四・一・三、一八八五・一・四、五、

一〇、二・九、八・五、一八八六・九・二五、一〇・一一、一二、一四、一一・一、二〇、一二・三一、一八八七・三・三、六・二七、九・一五の日記 以後出典として日記を記述する場合、「一八」と「日記」は省略。あれほど多彩な活動を展開した彼が自己を怠け者というのは、驚きの外はない。このような表白は、前述の二つの著作にみられず、この日記独特のものである。彼はこのように自らの罪を告白しつつ、その罪に打ち勝つのに聖霊の恩恵をときには断食をもって祈り求めた。彼はかつてL・L・ゼーンズより、神の事柄は人間の理性を越えている、神の霊を受けなければ理解できない、神に直接祈れ、と奨められた。彼はそれによって人間の理性を突き破る神の霊にふれ、天啓の宗教としてキリスト教を受容した。この体験がここに秘められているのかも知れない。彼が「聖霊の恩祐」(八四・一・三)を求めたことには、理由があった。一八八三年の横浜海岸教会の初週祈禱会に始まったリヴァイヴァルは、四月に彼の牧する東京第一基督教会に波及した。連夜の祈禱会で罪の悔い改め、信仰復興、伝道の決意表明がこたました。以後、教会は毎年連朝、連夜の祈禱会を数回開催し、これを起爆剤として活発な伝道を推進した。リヴァイヴァルは五月に東京各地で開かれた第3回日本基督教信徒大親睦会にも波及し、活況を呈した。翌八四年三月に同志社にもリヴァイヴァルが起り、罪の赦しと魂の新生を体験した学生たちは活力を得て各地に伝道した。

小崎は元來儒教的理性に立ち、有神哲学を論じる冷静な知識人であった。その故にこそキリスト教信仰に生きるためには、自らを克服し、聖霊による信仰復興と魂の新生を求めていた、と思われる。彼は後に「予が信仰の立脚地」(『基督教世界』一九〇七・五・三〇、六・一三)において、カトリックがよって立つドグマの権威、プロテスタントが主張する聖書の権威、ユニテリアンが唱える人間理性を信仰に関する最終の判断の基準としないで、神の霊による新生という宗教上の実験によって体得された宗教的意識、即ち聖霊によって潔められた理性が真理の基準であり、それが自己の信仰の立脚地である、と述べた。彼は、この立場が一八八九年の講演「聖書のインスピレーション」の

頃に確立したというが、その素地は東京伝道の苦闘の中にあつた、といえないだろうか。

彼の日記はその多彩な行動を記録する。まず、家族関係のことを述べる。このたび掲載した日記(1)の中に彼の妻千代の日記(八四・一)がある。それは、彼女が弘道と同伴で神戸に赴いたときの日記である。その出納記録は、乏しい家計をあずかり、やりくりする牧師家庭の主婦の姿を映し出す。ただ、その日付は疑問である。彼女は道雄に土産を買ったとあるが、長男道雄の誕生は一八八八年一月一六日である。家庭内に不和も生じることがあつたが、それに関する弘道の祈りは神の前に立つ謙虚な思いと家族への連帯意識を物語っている(八六・一〇・一九)。彼が家庭の人であつたことは、彼の母が入院したときの度重なる見舞い(八七・九・一五—一・一七)、次女桃代の臨終における介護と葬儀、墓参の記述(八八・二・二三—二九)より明白である。

次に、彼が牧した二つの教会のことを述べる。彼が東京に赴き、群羊社の人たちと一八七九年一二月に設立した新肴町教会のことは、『七一雑報』(一八七九・一二・二六、一八八〇・一・二三)などより知られている。その開拓伝道の厳しさは、日記に記されている(八〇・一〇・一七、二一、二四、一一・一一、一四)。教会は八二年九月に日本教会と合同し、東京第一基督教会と改称した。日本教会の創立者粟津高明の神道式葬儀のことは『七一雑報』(一八八〇・一一・二六)より知られているが、当日これに出席した彼の日記にもこの事は記録されている(八〇・一〇・三一)。八三年二月に小崎はキリスト教出版事業に専念するために牧師を辞任し、長田時行が仮牧師となった。しかし彼はなお教会で重要な位置を占め、月一回の礼拝説教をした。教会は赤坂霊南坂町に土地を取得し、新会堂を建築し、開所式を挙行した(八六・八・一)。欧化時代の波に乗って、教会は賑わつたが、その波はもうひとつの教会である番町教会を生んだ。小崎はこの教会の創立に深く関係していた。

番町教会の創立の始まりは、小崎が共存同衆(三菱系クラブ・ハウス)で三好退蔵、山下雄太郎、岡部長職、和田



垣謙三と会い、将来共にキリスト教を研究することを約束したこと（八五・八・三〇）で具体化していった、とされている。<sup>(2)</sup>しかし、日記は、それ以前に彼が岡部（八五・一・二〇）、和田垣（八五・三・一九）と会ったことを記録する。八月三〇日の会合はその一つの到達点かも知れない。彼はその後週一回ここで話をし、八六年四月に番町講義所を設立した。その講義所は東京第一基督教会の講義所ではなかったが、その信徒たちはこの教会の会員としてその礼拝にも出席していた。彼らはやがて独立した教会の設立を志すことになった。『七十年の回顧』では、小崎、三好、和田垣、森為国、松村介石がこの事を相談をしたという。日記にはそれに該当する記録はあるが、教会のことはなぜか記されていないし、松村の名前もない（八六・七・三一―一七）。

東京第一基督教会は八六年八月二四、二八日、九月一日と三回にわたる総会で、仮牧師であることに疑義を覚えていた長田の辞任に伴う牧師選定を論議した。その議場で教会と講義所の関係が問題となり、これに小崎牧師選定問題がからみ、紛糾した。結局議場は投票で彼を牧師に選定した。同年一月一二日に東京組合部会は地方会を開き、小崎が番町教会を助けることを忠告した後、就任式が開催された。その翌日に番町教会設立に関する地方会の後、その設立式が開催され、小崎は兼任牧師として就任した。しかし、一牧師が二つの強力な教会を牧することは、事実上不可能であった。翌八七年五月に彼は東京第一基督教会牧師辞任を申し入れた。同年一月一日に教会はその解任式、翌日に番町教会は彼の専任牧師就任式を挙行した。

小崎の日記は、東京第一基督教会の三つの総会についてほとんど何も述べていない。東京組合部会の地方会における東京第一基督教会の牧師就任の相談会、その翌日の番町教会設立の相談会、東京第一基督教会の牧師解任式、翌日の番町教会牧師就任式については、その事があったことを述べるにとどめている。しかし、その頃の日記に自省のこぼしが次々と述べられている（八六・九・二五、一一・一、一二・三一、八七・六・二七）。「事ヲ遷延スルノ弊、

「優々不断決心ノ乏シキコト」、「怯懦ニシテ勇氣ニ乏キコト」、「輕躁ニシテ事ヲ為スノ初メ十分ノ思慮ヲ為ズシテ跡ニテ悔ルコト多キコト」などが、それである。そういつた事のために彼はその経過を日記に簡単に記述することが出来なかつたのではなからうか。彼がたどつた道は、東京第一基督教会と番町教会の期待にこたえて、東京組合部会が忠告した兼牧という方法であつた。しかし、これは事実上困難であつた。その頃の彼の日記を読むと、これは明白である。そこで彼は有力な会員を擁する番町教会に使命を覚え、その専任牧師の道を選んだ(八七・五・二八)、と推定されるのである。

なお、番町教会には三好や和田垣との関係で、普及福音新教伝道会のW・シユピンナー(Wilfried Spinner)が聖書講義や礼拝説教を担当していたことが、日記よりも知られる。小崎はW・シユピンナーの見解に共鳴するところもあつたが、天啓の宗教としてキリスト教を認めない立場には反対であつた。そこで友好関係は保持したが、番町教会を普及福音教会に加えることは考えなかつた。普及福音新教伝道会は一八八七年二月に老岐坂に教会を設立した。小崎はその献堂式に臨み、所感を述べている(八七・一〇・三〇)。

次に、彼が属していた日本基督伝道会社、さらに日本組合教会との関係を述べる。彼は同志社英学校の学生時代より伝道会社との関係はあつた。たしかに彼の東京伝道はアメリカン・ボードの日本ミッシヨン、日本基督伝道会社の企画と無縁であつた。しかし彼の多様な伝道の経費や生活費を支えるに至らなかつたにせよ、彼は新島襄の斡旋で伝道会社より毎月九円の補助を受けることになつた(小崎弘道への新島襄の書簡一八八〇・一・五、二・二五)。アメリカン・ボードより会堂建築のために五〇〇ドルの寄付を受けたこと(八五・三・六、小崎への新島の書簡 一八八五・三・一八)は、靈南坂に新会堂建築(八六・八・一)にはずみをつけた。彼が伝道会社の依頼で東北巡回伝道にたずさわつたことは、『七十年の回顧』に述べられている。しかし、それよりも彼の日記(八五・九・二〇―二五)

の方がはるかに生々しい。そこには日数を要したこと、困難な当時の交通事情、様々な人たちとの新たな出会いが述べられている。『日録第二』がないので、その巡回伝道の記録は中断している。幸にして彼が再び仙台に赴いたときの日記（八七・三・一〇—二三）があるので、そこよりも同様のことが知られるのである。

一八八六年四月の第9伝道会社年会で日本組合教会が設立され、規約が制定されたことは、既によく知られている。<sup>(3)</sup>その規約について、八四年六月の第7年会が草案を審議し、その修正を可決した（『東京毎週新報』一八八四・七・四）。翌年の第8年会がそれをどのように処理したかは、年会記録はもとより、当時の『基督教新聞』が現存しないので不明であった。日記は八五年五月一日に始まる年会の模様を伝え、二日に「基督教会組合ノ規約ヲ議決ス」と記録する。それが翌年の第9年会で可決されたことになるのである。さらに、組合教会というのは、各地のキリスト教会の組合と理解されていたことが、ここより知られる。『七十年の回顧』（七八頁）で、小崎は、組合教会という名称が、教会の組合をつくり、共に神の国の発展を図るという意味から出た。組合というのは当時の通俗的名称であった、と述べている。このことが日記であらためて確認されたことになる。当時の組合の社会的通念がどういうものであったかは、あらためて歴史的に究明されなければならない。規約第1条、第2条によれば、日本組合教会は、各地にある独立自治の教会が一定の信仰簡条（当時は万国福音同盟会の教理的基礎九カ条）のもとに交わりを厚くし、相互に扶助し、個別的に出来ない事業を遂行するために結成された組織ということになる。組合教会を各個教会主義とか無信条主義というあいまいな概念でとらえる人たちがいる。その人たちはこの規約を読んだこともないか、読んでも理解しようとしなやかである。

最後に、東京在任の諸教派の指導者たちとの関係を述べる。新肴町教会は津田仙の学農社の分教場に設置され、その会員岡田松生は学農社の教師であった。津田はメソジストの信徒であったが、小崎の諸活動の強力な支援者であつ

た。一八八〇年一二月に自分の近親で、当時自分の家に寄寓していた岩村千代を生涯の伴侶として小崎に紹介したのは、津田であった。日記によれば、小崎が『六合雜誌』創刊号(一八八〇・一〇・一一)を内務省の許可を得る前に刊行したので、警視庁に出頭しなければならなかったが、津田はその許可を得るために彼を助けた(八〇・一〇・一五、一八、二一)。津田は彼の生活費を少しでも支えるために、彼を学農社で教えさせた。彼は日記で津田「先生」と記して敬意を表わしている。彼は日本基督一致教会の築地神学校で教え、井深梶之助、押川方義、田村直臣、植村正久などと親交があった。とくに植村「兄」との関係は親密であったことが日記より知られる。当時、植村は下谷一致教会の牧師であった。一八八〇年三月に小崎が東京のキリスト者たちと共に基督教青年会を結成したとき、植村はこれに加わり、小崎とその活動を共にした。小崎が『六合雜誌』を刊行したとき、植村は数多くの論説を寄稿し、一時彼と編集を担当した(八六・一一・三)。これらは当時のキリスト教系新聞・雑誌より知られるが、日記はそのほかに興味あることを伝える。小崎は下谷教会で礼拝説教、植村は新着町教会や東京第一基督教会で礼拝説教、安息日学校や祈禱会の奨励を時として依頼されていた(八〇・一一・七、一四、八五・七・二二、一九、八・八)。彼らの間に説教、奨励という次元では教派の相違はあまり意識されていなかったことになるのである。

このようなことも、一致、組合両教会の合同問題の伏線となった。この合同運動は、一八八六年三月に小崎、植村を含む両教会指導者有志が日本基督教会設立書草案を公表したことに始まる、と思われる。<sup>4</sup>ところが、日記はそれより約一年前に井深宅で合同問題の相談会があり、小崎と植村はその規則草案をつくる委員となったことを伝える(八五・四・二一)。日記は合同問題に関する相談会(八六・四・二一、五・一七、六・一、一〇、一四、八七・三・一四、四・三〇、五・三、八八・二・四)、第2回組合教会總會における協議(八七・五・四一六、一一)、両教会選出の委員の会合、草案の審議と彼や植村を含む五人の委員による原案、つまり『日本基督教会憲法並細則付録』の作成

(八八・二・九一―一、一三一―一五)を記している。この運動に対する小崎の思い入れが強かったことが、ここよりも知られるのである。

このほか、日記には小崎がその設立と経営に苦勞した警醒社のこと記されているが、これに関する論文が他にないので、割愛する。また、「上流社会の伝道」(「余が廿五年の経歴」と称して、明六社の人たちや政府官僚への接触、そして東京大学哲学会への出席、仏教者への接触などが日記に記されているが、それらは彼の二つの著作に詳しく述べられており、日記の叙述はあまりにも簡単であり、追加や修正することもないので、省略する。ここでは、彼の教会関係のことを主として述べた。一言にして言えば、日本のプロテスタント・キリスト教の青春期の名にふさわしく創意工夫に富み、試行錯誤をほらみつつも前進していった歴史の一齣が、この日記に反映しているのである。

## 註

- (1) 小崎弘道の思想、特にここで述べた彼の神学の方法論については「小崎弘道」(和田洋一編『同志社の思想家たち』下巻、同志社大学生協出版部、一九七三、七三―七八頁)、「草創期のキリスト教指導者たち」(共著『日本神学史』ヨルダン社、一九九二、四五―四七頁)で述べたので参照されたい。
- (2) 『靈南坂教会一〇〇年史』一九七九、一二二頁、番町教会百年史』一九八六、二二頁
- (3) 第9回日本基督伝道会社議事録は「日本基督伝道会社第九年会記事」として『同志社談義』第3号、一九八三に、そして「日本組合教会規約」は湯浅与三『基督にある自由を求めて 日本組合基督教会史』創文社、一九五八、一七―一七三頁に収録されている。
- (4) 「教報／日本基督教会の設立」(『基督教新聞』一八八六・三・一二)。「植村正久と其の時代」第三卷、六七三―六七五頁はこの記事を掲載したが、どういふわけか、小崎の名前を失念している。それによつた筆者も彼の名前を入れなかった(「一致、組合両教会の合同運動」『日本プロテスタント教会の成立と展開』日本基督教団出版局、一九七五、六四頁)。研究は原資料によつてなされなければならないことを自省の念をこめて述べ、謹んで修正する。